



R2.1.8現在	学級数	生徒数
1 学 年	8	302
2 学 年	8	297
3 学 年	7	271
特別支援	3	17
合 計	26	887

初心不可忘

校長 窪田 和彦

新年おめでとうございます。令和2年・2020年が幕を開けました。保護者及び地域の皆様におかれましては、よき新年を迎えられたことと思います。お慶び申し上げます。

3学期が始まりました。1月8日の始業式での皆さんの姿勢は、とっても素晴らしいものでした。しんと冷え込む体育館の中でも、姿勢を崩さず、顔を上げて目でしっかりと話を聴く姿勢は立派でした。これは簡単にできることではありません。皆さんそれぞれが、場の状況を考えて行動しているからこそその結果です。今年も「挨拶・清掃・合唱・授業」を伝統として更なる成長を期待しています。

さて、年の初めは不思議と心改まるものです。昔から「1年の計は元旦にあり」と言われます。皆さんも「今年はこちらを頑張る」「今年はこちらになりたい」「今年はこちらを挑戦する」などといった決意や願い事をしたのではないのでしょうか。

人は大きな目標が無ければ、小さな目標を達成するどころか、日々の自分の指針を持つことができません。実現することが困難ではないか？と思われるような大きな目標であっても、小さな努力を重ねていけば 実現する可能性も出てきます。

「最初の決意・目標を忘れてはならない」という意味でよく使われる言葉に、「初心忘るべからず」という諺があります。しかし、本来は別の意味のようです。実は、この言葉には続きがありました。

「是非とも初心忘るべからず」「時々の初心忘るべからず」「老後の初心忘るべからず」

「初心」が三度も出てきます。ここでの「初心」とは、何だと思えますか。

最初の「初心」は、「最初に味わった未熟さや失敗の実感、それを乗り越えて身に付けたもの、その感覚」。さらに、「時々の初心」「老後の初心」は「その時々積み重ねて身に付けたもの、その実感、新たな思い」という意味があると言われています。

つまり、「初心」とは、最初の段階の「決意」だけではなく、「日々の生活の中で味わったもの、身につけたもの、その実感や感覚」であり、忘れてはならないとしています。この言葉は、約600年前、能楽に関する様々な文書を執筆した中の「花鏡（かきょう）」という伝書に世阿弥（ぜあみ）という人物が書き残しています。（※現在の「能」という芸術を形作った人として知られています。）

「初心忘るべからず」は、芸の上達に励む、愛する弟子たちへ贈る言葉であったようです。考えてみると、私たち自身、年齢に関係なく、常に新しい世界、新しいステージがあり、新しい挑戦があります。未熟であったころの自分を忘れず、自分の成長や変化をとらえながら、新しい自分を描く、そのような意味に受け取れます。

3年生の皆さん、卒業まで45日となりました。自分の目指す進路へ向けて自信をもって進んでください。体調に十分気をつけて努力を続けてください。

2年生の皆さん、4月から最上級生になります。責任も重くなります。3学期の53日間はその準備期間だと考えてください。築き上げてきたものを引き継ぎ、3年生が安心して卒業できる学校・環境を創ってください。

1年生の皆さん、4月には先輩と呼ばれます。後輩に慕われる先輩になれるよう、今以上に力と思いやりの心を身につけてください。

最後になりましたが、令和2年の始まりにあたり、「生徒・保護者・地域・教職員が誇りとする学校」となるよう教職員一同、力を合わせて努力してまいります。保護者、地域の皆様には、引き続き本校の教育活動に御支援・御協力を賜りますようお願い申し上げます。